

第三章 大正元年九月～十五年

(一九一二～一九二六)

クローンとベートーヴェンの交響曲

明治四十五年(一九一二)、ユンケルが契約満期となり翌年(大正二年)彼に代ってドイツからグスターフ・クローン(Gustav Krom 1874)を管弦楽およびヴァイオリンの教師に雇い入れた。彼はドレスデン音楽学校を卒業、ハンブルク・フィルハーモニー協会およびベルリン・フィルハーモニー管弦楽団のヴァイオリン奏者を経て、指揮者ニキシュの推薦により来日、先に東京音楽学校で教鞭をとっていたチエロのヴェルクマイスターと共に大正時代の東京音楽学校管弦楽団を研ぎあげた。当時の東京音楽学校はすでに啓蒙期を脱し、創立以来最も活気ある時代を形成していた。幸田延、幸の姉妹につづいて留学体験をもつ新進気鋭の音楽家が創作に演奏に教育に旺盛な活動を行っていた(瀧廉太郎、ドイト、島崎赤太郎、ドイト、神戸絢二フランソ、小倉末二ドイト、アメリカ)。

クローンは大正二年十二月七日、第二十九回の定期演奏会でベートーヴェンの《ヴァイオリン協奏曲》(ニ長調、作品六十一)をH・ヴェルクマイスターの指揮のもとで演奏し、彼の就任披露演奏をかざった。このプログラムではベートーヴェンの曲が三曲もとりあげられ、クローンが計画したベートーヴェン紹介の皮切りともいえる演奏会であった。クローンが東京音楽学校管弦楽団の指揮を担当して四年目の大正六年頃になると、それまで同校管弦楽団の弦を援助していた宮内省の伶人が退き、弦は同校職員生徒が主となり、管部門に海軍軍楽隊員の応援を得て成り立つようになっていた。翌七年からはきびしい練習の成果としてベ

ーヴェンのシンフォニーが順次定期演奏会に登場した。《第五》(初演)大正七年五月二十六日、《第六》(初演)大正八年六月一日、《第一》大正九年六月十二、十三日、《第三》大正九年十二月四、五日、この時は、ベートーヴェン生誕百五十年記念演奏会というタイトルのもとにオールベートーヴェンでプログラムが組まれ、小倉末のピアノによる《協奏曲第三番》の全曲演奏も含まれていた。さらに《第八》大正十一年十二月二、三日、そして《第九》が大正十三年十一月二十九、三十日の両日、全曲本邦初演である。この演奏はクローンの東京音楽学校における最後の指揮であった。《第九》で有終の美をかざった大正十三年(一九二四)は、ウイーンの世界初演からかぞえてちょうど百年目である。クローンは東京音楽学校と契約した時点で、ベートーヴェンの主要作品を日本に紹介することを計画した。そして偶然にも彼の契約満期となる大正十三年に《第九》でベートーヴェン演奏を終ることを意図していたものと思われる。またクローンは在任中に次のような大曲を初演して東京音楽学校のレパートリーに加えた。チャイコフスキーの《バレエ組曲「クルミ割り人形」》(大正五年五月)、同じく《交響曲第六番「悲愴」》(大正十年五月)、リストの《交響詩「レ・プレリュード」》(大正五年五月)、バッハの《ブランデンブルク協奏曲第三番》(大正九年六月)、ロッシニーの《スターバト・マリエル》(大正十一年十二月)、シベリウスの《交響詩「フィンランディア」》(大正十二年五月)など。

大正もやがて終りを告げるこの時代になると「管弦楽をたのしんで聴く」聴衆が多くなり、東京音楽学校の定期演奏会には手応えのあるファーンが定着するようになった。

なお、「本邦初演」という定義については放送関係機関等で定義づけられている「作品のオリジナルの形を公開の演奏会で全曲演奏すること」に準拠した。

大正一年九月二十一日 学友会第二回土曜演奏会

■九月の學友會の第二回土曜演奏會は蓄音機會として、現時世界